

病害虫発生予察情報予報第1号(5月の予報)

佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	5月の予想発生量 ^{注2)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病害虫(抜粋)	
		平年比	前年比			
水稲(早期・早植え)	いもち病	並	並	126~135 137~142	 いもち病	
	ばか苗病	並	並	126~135		
	イネミズゾウムシ	並	並	170~171		
	1. 病害虫全般 育苗箱処理剤は、防除効果を確保するため、基準量をむらなく処理する。 2. イネミズゾウムシ 例年、発生が多い地域では、本虫に登録のある箱処理剤を処理する。					
水稲(普通期)	1. いもち病 昨年多発した地域では、菌密度が高まっていると考えられる。既存の種子消毒剤にベノミル水和剤を加えた種籾消毒を徹底し、常発地帯では育苗期から防除を行う。また、育苗箱で種籾が露出すると本病が発生しやすいため、覆土を適正に行う。 2. もみ枯細菌病 種子消毒を確実に実施する。さらに苗箱の覆土前にカスガイシン液剤の散布を行うと有効である。					
タマネギ	べと病	中晩生	並	並	261~264	 べと病
	ポトリチス葉枯症		やや多	多	265	
	ネギアザミウマ		やや多	並	272~273	
	1. べと病(中晩生) 中晩生品種では、5月上旬まで二次伝染による感染リスクがある。本病による被害を抑えるため、早生品種の収穫中であっても、定期的な薬剤防除を切れ目なく実施する(令和2年4月3日付け病害虫対策資料第1号参照)。 2. ネギアザミウマ 発生を認めた圃場では、低密度時からの防除を行う。本虫は薬液のかかりにくい葉の隙間に寄生しているため、薬剤はそれらの部位にもかかるよう、生育に応じた十分量を丁寧に散布する。 3. 細菌性病害(腐敗病・軟腐病等) 防除暦に従って薬剤防除を実施する。発病株は周囲の伝染源となるため、速やかに抜取り、圃場外へ持ち出し処分する。貯蔵中の腐敗の一因となるため、対策を徹底する。					
イチゴ(育苗圃)	ハダニ類		多	多	209~210	 ハダニ類
	うどんこ病		やや少	並	199~201	
	アブラムシ類		やや多	並	214~215	
	1. 親株での立枯性病害、ハダニ類、うどんこ病 健全苗を育成するため親株床から薬剤防除を実施する。立枯性病害(炭疽病、萎黄病、疫病)の苗での発生を抑えるため、発病した親株は、発生した子苗とともに見つけ次第除去し、圃場外で適切に処分する。					

作物名	病虫害名 ^{注1)}	5月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のて びきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
キュウリ	べと病	やや少	少	179~180	 キュウリ うどんこ病
	うどんこ病	並	少	177~179	
	褐斑病	やや少	並	182~183	
	灰色かび病	並	並	180~181	
	アザミウマ類	並	やや多	191~192	
	コナジラミ類	多	並	190~191	
1. ミナミキイロアザミウマ (黄化えそ病)、タバココナジラミ (退緑黄化病) 両害虫はウイルス病を媒介するため、低密度時に薬剤防除を実施する。また、罹病株を認めた場合は早急に除去するとともに、媒介虫を対象とした薬剤防除を実施する。					
トマト	葉かび病	並	並	226~227	 葉かび病
	灰色かび病	少	並	221~222	
	コナジラミ類	やや少	やや少	152~154 229~231	
1. 黄化葉巻病 一部の圃場で発生が見られる。発病株は抜き取り、適切に処分するとともに、媒介虫であるタバココナジラミの防除を徹底する。					
ナス	すすかび病	やや少	やや少	236~237	 ミナミキイロアザミウマ
	灰色かび病	やや少	並	235~236	
	アザミウマ類	並	やや多	155~159 242~243	
	コナジラミ類	多	多	152~154 243~244	
アスパラガス	茎枯病	並	並	313~314	 ネギアザミウマ
	褐斑病	並	並	315	
	斑点病	並	並	314~315	
	アザミウマ類	並	少	317~318	
1. 茎枯病、褐斑病、斑点病 定期的な薬剤防除を継続する。特に、茎枯病については、降雨時にサイドビニルを降ろし、雨の降込みを防ぐとともに、発病茎は見つけ次第、除去し適切に処分する。					

作物名	病虫害名 ^{注1)}	5月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害(抜粋)
		平年比	前年比		
果樹全般	果樹カメムシ類	多	多	250~253	
	<p>1. 果樹カメムシ類(チャバネアオカメムシ) 本年は果樹カメムシ類(チャバネアオカメムシ)の越冬量が平年より多いことから、4月~8月上旬頃までの本虫の発生が多く、果樹園への飛来量も多くなると考えられる。圃場観察を徹底して早期発見・早期防除に努める(令和2年3月4日付け病虫害対策資料第15号参照)。</p>				
カンキツ	そうか病	並	並	220~222	 かいよう病
	かいよう病	並	並	224~226	
	灰色かび病	やや多	やや多	226~227	
	ミカンハダニ	並	やや少	245~247	
	<p>1. かいよう病 昨年の台風や強風雨の影響により一部圃場で発生を確認していることから、菌密度は高いと推察される。6月までは本病の重要な防除時期であり、今後の発生を抑制するため、本病が発生しやすい園および幼木園では防除を徹底するとともに、罹病枝葉は必ず剪除する。</p> <p>2. 灰色かび病 本年は着花が多いと予想されており、本病が発生しやすい条件となっている。本病が多発する園や着花が多い園では、薬剤防除を徹底するとともに、樹を揺すって花弁を落とす。</p> <p>3. ミカンハダニ 殺ダニ剤に対する感受性低下を防ぐため、4月~6月下旬はマシン油乳剤の使用を基本とする。ただし、樹勢が低下している樹や着花が少ない樹では、マシン油乳剤の散布を控え、殺ダニ剤散布で対応する。</p>				
ナシ	黒星病	並	並	288~291	
	<p>1. 黒星病 5~6月中旬までの薬剤防除は、原則的に保護殺菌剤を使用する。ただし、長雨等で薬剤散布ができなかった場合はDMI剤を散布する。</p>				
ブドウ	黒とう病	並	並	333~335	
	べと病	並	並	336~338	
<p>1. スピードスプレーヤーによる薬剤散布 全列走行を基本とする。なお、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布などにより、丁寧に散布する。</p> <p>2. 果粒の汚れ及び果粉の溶脱の防止 袋かけ前(大豆大期)に薬剤防除を行う際は、果粒の汚れ及び果粉の溶脱が少ない薬剤を選定する。</p>					
キウイフルーツ	<p>1. かいよう病 感染防止のため、6月まではすべての園において、銅水和剤を主体とした定期的な薬剤防除を実施する。なお、幼木は成木に比べ発病しやすく、また枝枯れや樹液の漏出など症状がひどく出やすいため、特に防除対策を徹底する。</p>				 葉の斑点症状

作物名	病虫害名 ^{注1)}	5月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
茶	カンザワハダニ	やや多	やや多	418~419	 カンザワハダニ
	クワシロカイガラムシ	並	並	425~426	
	チャノキイロアザミウマ	並	並	424~425	
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	やや多	423~424	
	チャノホソガ	並	並	421	
	1. カンザワハダニ 被覆栽培はカンザワハダニの発生加害を助長するため、新芽の状況を観察し、被害が多い場合は品質低下を考慮して早めに摘採を行う。また、一番茶摘採後においても本種の発生が見られる園では追加防除を実施する。				
2. クワシロカイガラムシ 幼虫ふ化期は5月中~下旬頃である。園内の発生ふ化状況を観察し、ふ化最盛期に防除を実施する。多発生の園では、一番茶後深刈り、中切り等の耕種的防除を行う。					
3. チャトゲコナジラミ 第一世代若齢幼虫の発生期となる5月中~下旬頃にクワシロカイガラムシと同時防除を行う。					
4. ナガチャコガネ 発生圃場では、羽化期~成虫発生初期に薬剤防除を実施する。					

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年および前年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年および前年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「[佐賀県病虫害防除のてびき](#)」も参照してください。

II. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去10年間）及び前年と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
○ 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、(－)：少発生、(－～±)：やや少発生、(±)：並発生、(±～＋)：やや多発生、(＋)：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（1ページの予報の概要にリンク有り）。

写真

- 1～4ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
6ページ目以降：定期調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

5月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する5月の気象条件については、福岡管区気象台発表の1ヶ月予報（令和2年4月23日）を基に、「気温：平年よりやや高い」、「降水量：平年並」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%)及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	1ヶ月予報における5月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	20	40 (19.5℃)	40	やや高い
降水量	40	30 (198 mm)	30	並

Ⅲ. 5月の予報

水稻(早期・早植え)

[【 概要に戻る 】](#)

1. いもち病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 前年の穂いもちの発生状況

令和元年の穂いもちの発生株率は、上場地域の早期水稻（8月上旬）で4.3%（平年5.0%）、北部山間の早植え水稻（9月上旬）で1.8%（平年9.1%）、普通期水稻（10月上旬）で9.7%（平年15.5%）であり、早期は平年並、早植えは平年よりやや少なく、普通期は平年並であった。〈±〉

(2) 5月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 水田周辺に放置された予備苗から葉いもちが蔓延することがあるので、補植後は早急に取り除く。
- (2) 苗いもちがみられたら、早急に取り除くとともに防除を行う。
- (3) その他については、特記事項を参照する。

2. イネミズゾウムシ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 前年の発生状況（越冬密度）

前年の発生は平年並であり、越冬密度は平年並と考えられる。〈±〉

(2) 5月の気象予報

気温が平年よりやや高く、やや多発生の条件〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 越冬成虫は4月中旬～6月上旬に水田へ侵入する。本田での発生状況の把握に努め、成虫が10株当たり5頭以上みられたら、粒剤を散布する。
- (2) その他については、特記事項を参照する。

タマネギ

（定期調査 早生 10 圃場、中晩生 10 圃場）
調査日：4月15日



定期調査圃場の様子

1. ベと病（中晩生）

[【 概要に戻る 】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：18.4%（平年18.5%、前年13.6%）

平年比：並(±) 前年比：並(±)

(2) 感染好適気象条件の出現状況 (図2参照)

【これまでの状況】

気象解析の結果、本病の感染・準感染好適条件が、2月中旬～3月下旬に断続的に出現した(図2中に○で表示)。これらの時期の感染が、約2～3週間の潜伏期間を経て、3月中旬～4月中旬頃の発病につながった。

【今後の予想】

感染・準感染好適条件が、4月17～20日にも出現していることから、約2週間の潜伏期間を経て、今後、発病が増加する可能性がある。(±)

(3) 5月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件(±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

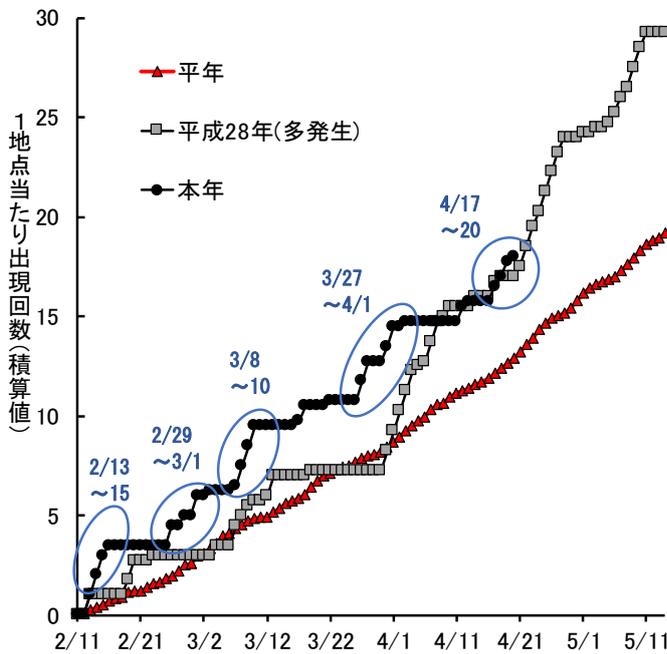


図2 タマネギべと病の感染・準感染好適気象条件の出現延べ回数

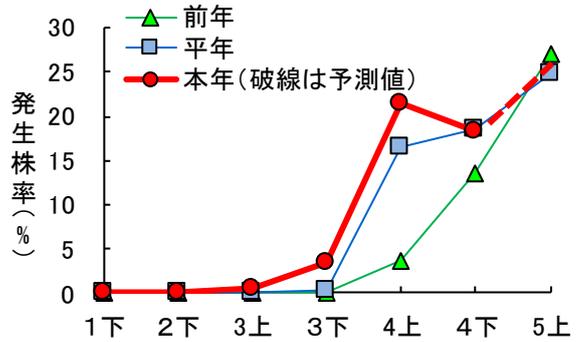


図1 中晩生タマネギでのべと病の発生推移

注1) 感染(準感染)好適条件が現れた場合、感染株では約2週間後から、初発生あるいは発病株(病斑数)の増加が予想される。

注2) 感染(準感染)好適条件は、農業試験研究センター作成の「高湿度継続時間を指標とした二次伝染推定モデル」により判定した。本モデルでは、毎正時の湿度データを利用しているが、佐賀県内で気象庁による湿度の観測地点は、佐賀市だけである。一方で、気象条件が、感染条件の基準すれすれの状態にあるときには、観測地点によっては、好適条件の出現リスクを見逃す危険性がある。そこで、図2では、佐賀県および近隣県の合計4地点における、1地点当たりの感染・準感染好適条件の出現回数の積算値を示した。

2. ボトリチス葉枯症

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い (前年より多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1参照)

発生株率：17.4% (平年9.6%、前年2.7%)

平年比：やや多(±～+) 前年比：多(+)

(2) 5月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件(±)

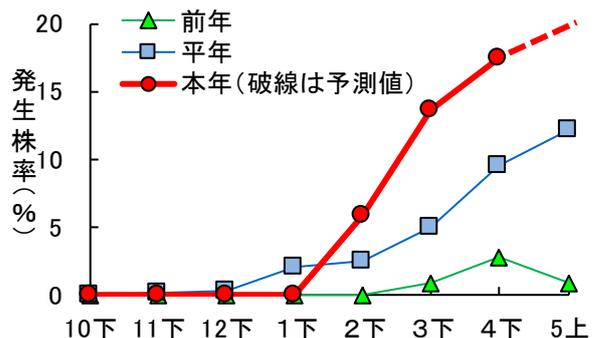


図1 タマネギボトリチス葉枯症の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生を認めた場合には、速やかに薬剤防除を実施する。

3. ネギアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

①定期調査（図1参照）

発生株率：15.7%（平年11.5%、前年21.2%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 5月の気象予報

気温が平年よりやや高く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

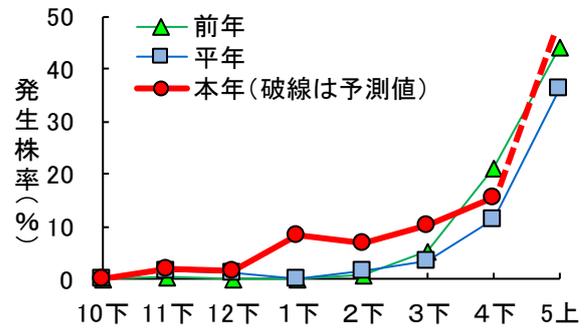


図1 ネギアザミウマのタマネギでの発生推移

イチゴ（育苗圃）

（定期調査9圃場）

調査日：4月15～20日



定期調査圃場の様子

1. ハダニ類

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

①定期調査（図1参照）

発生株率：6.7%（平年2.2%、前年1.3%）

平年比：多（+） 前年比：多（+）

(2) 5月の気象予報

気温が平年よりやや高く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 圃場によりハダニ類の薬剤感受性が異なるため、防除効果を確認し、薬剤を選定する。

(2) 薬剤防除の際は、下葉や葉裏まで薬液が付着するように十分量を丁寧に散布する

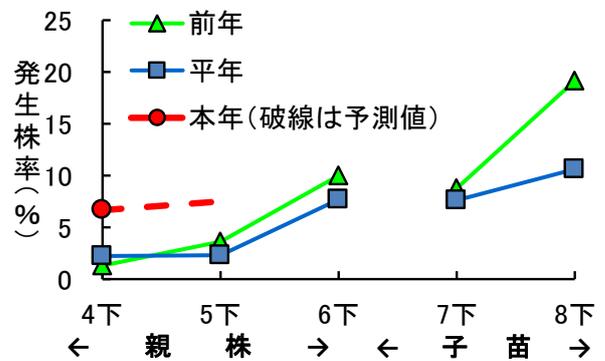


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

2. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

①定期調査（図1参照）

発生株率：0%（平年4.9%、前年0%）

平年比：やや少（-～±） 前年比：並（±）

(2) 5月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件（±）

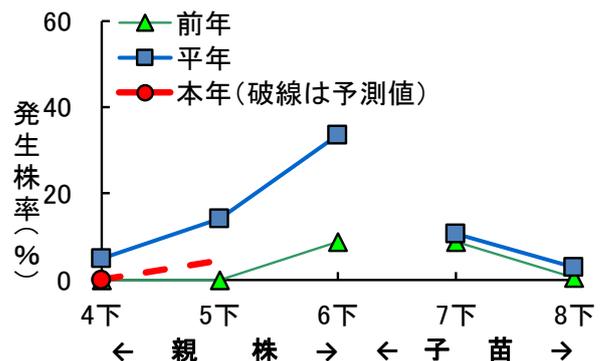


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

- 3) 防除上注意すべき事項
 (1) 親株での薬剤防除を徹底する。

3. アブラムシ類

- 1) 予報の内容
 発生量：平年よりやや多い（前年並）
- 2) 予報の根拠
 (1) 発生の現況
 ①定期調査（図1参照）
 発生株率：12.0%（平年5.7%、前年11.6%）
 平年比：やや多（±～+） 前年比：並（±）
- (2) 5月の気象予報
 気温が平年よりやや高く、やや多発生の条件（±～+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 (1) 圃場周辺の雑草は本虫の発生源となるため、除草を行う。

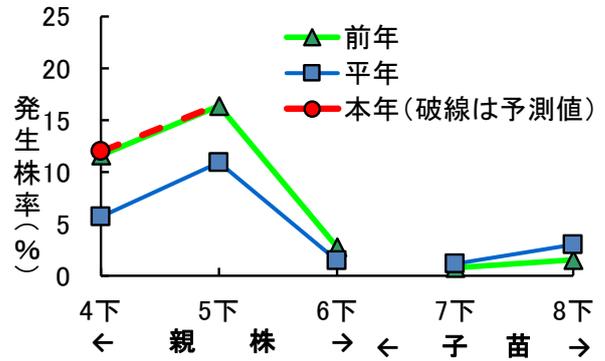


図1 アブラムシ類のイチゴでの発生推移

キュウリ

(定期調査5圃場)
 調査日：4月15～20日



1. アザミウマ類

[【 概要に戻る 】](#)

- 1) 予報の内容
 発生量：平年並（前年よりやや多い）
- 2) 予報の根拠
 (1) 発生の現況
 ①定期調査（図1参照）
 発生株率：9.0%（平年9.7%、前年0.6%）
 平年比：並（±） 前年比：やや多（±～+）
- (2) 5月の気象予報
 気温が平年よりやや高く、やや多発生の条件（±～+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 (1) 特記事項を参照。

定期調査圃場の様子

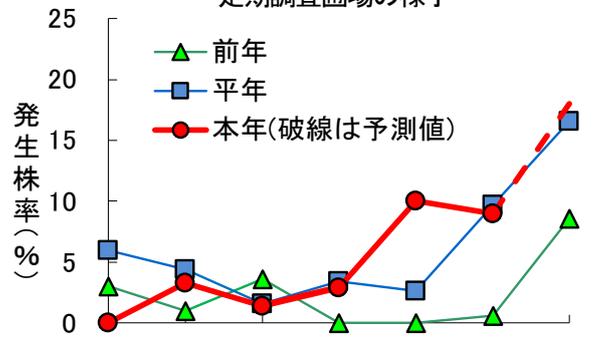


図1 アザミウマ類のキュウリでの発生推移

2. コナジラミ類

- 1) 予報の内容
 発生量：平年より多い（前年並）
- 2) 予報の根拠
 (1) 発生の現況
 ①定期調査（図1参照）
 発生株率：4.0%（平年0.5%、前年2.5%）
 平年比：多（+） 前年比：多（+）
- (2) 5月の気象予報
 気温が平年よりやや高く、やや多発生の条件（±～+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 (1) 特記事項を参照。

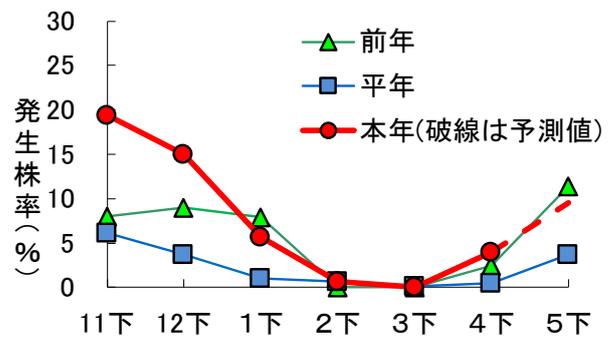


図1 コナジラミ類のキュウリでの発生推移

トマト

定期調査：6圃場
調査日：4月14～20日



定期調査圃場の様子

1. 葉かび病

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：11.7%（平年8.5%、前年13.1%）
平年比：並<±> 前年比：並<±>

(2) 5月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件<±>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生がみられる圃場では、発病部位の除去と系統（FRACコード）の異なる薬剤（防除のてびき P470-473 参照）を組み合わせたローテーション防除を実施する

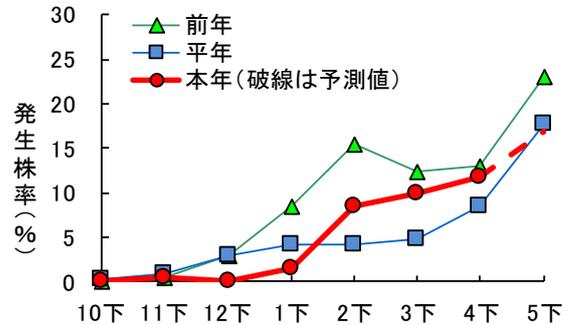


図1 トマト葉かび病の発生推移

2. 灰色かび病

1) 予報の内容

発生量：平年より少ない（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：0%（平年7.6%、前年0%）
平年比：少<-> 前年比：並<±>

(2) 5月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件<±>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生がみられる圃場では、発病部位の除去と系統（FRACコード）の異なる薬剤（防除のてびき P470-473 参照）を組み合わせたローテーション防除を実施する

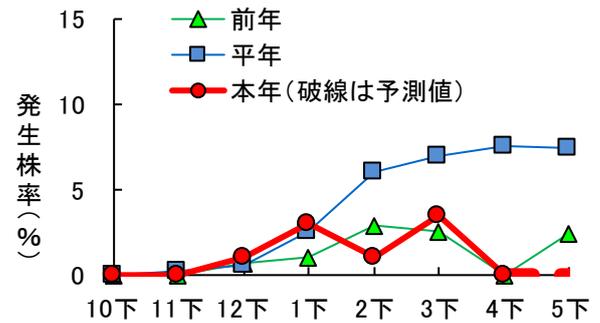


図1 トマト灰色かび病の発生推移

3. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：1.7%（平年5.6%、前年6.3%）
平年比：少<-> 前年比：少<->

(2) 5月の気象予報

気温が平年よりやや高く、やや多発生の条件<±~+>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

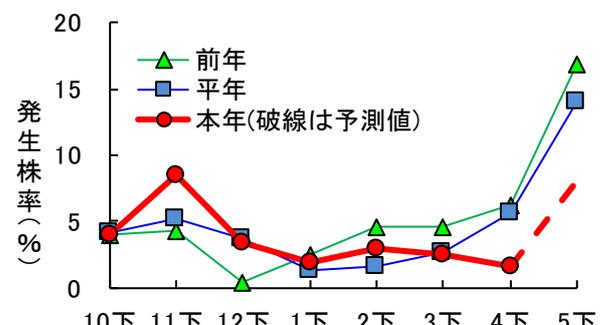


図1 コナジラミ類のトマトでの発生推移

ナス（促成）

定期調査：6 圃場
調査日：4月15～20日

1. アザミウマ類

[【概要に戻る】](#)

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年よりやや多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①定期調査（図1参照）
発生株率：0%（平年8.0%、前年2.9%）
平年比：やや少（-～±） 前年比：並（±）
 - ②5月の気象予報
気温が平年よりやや高く、やや多発生の条件（±～+）
 - (2) 5月の気象予報
気温が平年よりやや高く、やや多発生の条件（±～+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。



定期調査圃場の様子

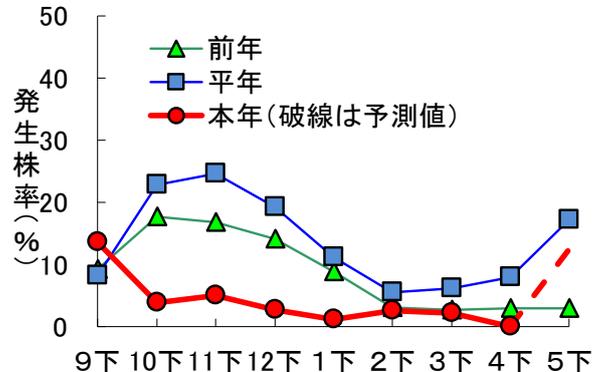


図1 アザミウマ類のナスでの発生推移

2. コナジラミ類

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①定期調査（図1参照）
発生株率：15.8%（平年6.6%、前年7.1%）
平年比：多（+） 前年比：多（+）
 - ②5月の気象予報
気温が平年よりやや高く、やや多発生の条件（±～+）
 - (2) 5月の気象予報
気温が平年よりやや高く、やや多発生の条件（±～+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) アザミウマ類の項と同じ。

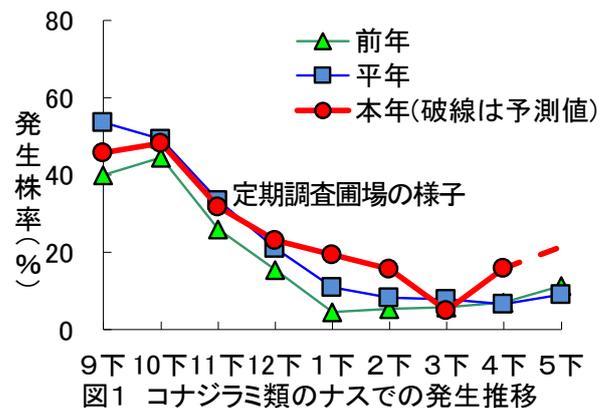


図1 コナジラミ類のナスでの発生推移

アスパラガス

定期調査：7 圃場
調査日：4月15～20日

1. 茎枯病

[【概要に戻る】](#)

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①定期調査（図1参照）
発生茎率：0%（平年0.0%、前年0%）
平年比：並（±） 前年比：並（±）
 - ②5月の気象予報
降水量が平年並で、並発生の条件（±）
 - (2) 5月の気象予報
降水量が平年並で、並発生の条件（±）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。



定期調査圃場の様子

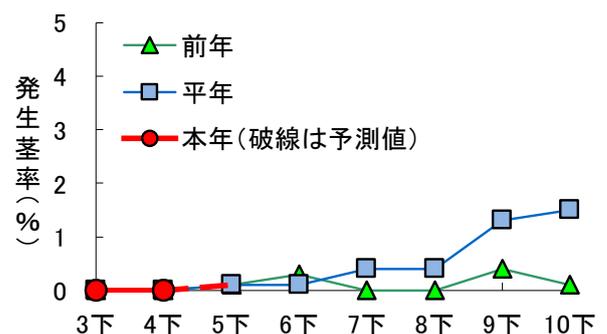


図1 アスパラガス茎枯病の発生推移

2. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年より少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：1.4%（平年8.8%、前年0%）

平年比：やや少（-〜±） 前年比：並（±）

(2) 5月の気象予報

気温が平年よりやや高く、やや多発生の条件（±〜+）

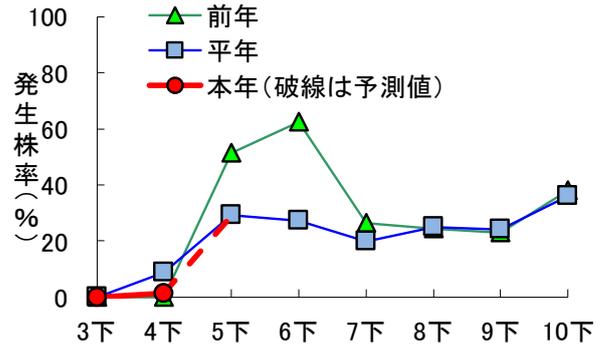


図1 アスパラガスでのアザミウマ類の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 若茎及び親茎への寄生や食害による被害を防ぐため、虫見板（約20×30cm）への払い落とし（擬葉部を2〜3回叩く）により発生頭数を調査し、成虫が1ヶ所当たり3頭以上認められる場合は薬剤防除を行う。

果樹全般

1. カメムシ類

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容（4月〜8月上旬）

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) チャバネアオカメムシの越冬状況調査（詳細は、令和2年3月4日付け病虫害対策資料第15号参照）

①越冬地点率：68.2%（平年37.3%、前年54.5%）

平年比：多（+） 前年比：やや多（±〜+）

②平均越冬虫数：0.52頭/m²（平年0.26頭/m²、前0年0.24頭/m²）

平年比：多（+） 前年比：多（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

カンキツ

定期調査：8圃場

調査日：4月14〜15日



定期調査圃場の様子

1. そうか病

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生葉率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 5月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件（±）

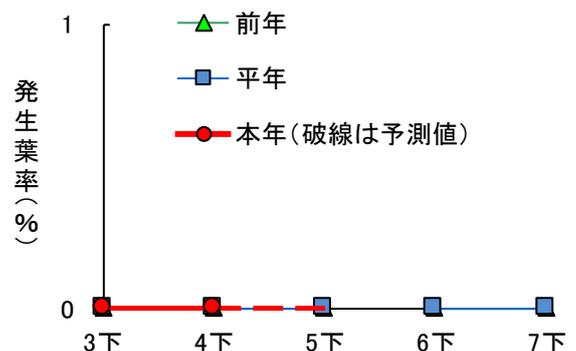


図1 カンキツそうか病の発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

3) 防除上注意すべき事項

(1) 果実への感染を防止するため、落弁期に防除を行う。

(2) 果実に薬害を生じる場合があるため、落弁期以降にデランフロアブルとマシン油乳剤の混用又は近接散布は行わない。

2. かいよう病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生葉率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉

(2) 昨年10月および2月の定期調査において一部園場で発生を

確認しており、園内の菌密度が高まっていると推察される。〈±〜+〉

(3) 5月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 前年に発生した園や風当たりが強い園、罹病性品種（レモン、ネーブル、はるみ等）の植栽園、新梢の伸長が遅くまで続く園（幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等）など発生が問題となる園では、無機銅剤水和剤（クレフノン200倍加用）またはICポルドー66D（アビオンE1,000倍加用）で定期的に防除を行う。散布間隔の目安はクレフノン200倍加用無機銅水和剤で20～25日で、ICポルドー66Dの場合は30日とする。
- (2) ICポルドー66Dは、展葉期に単剤で散布すると、葉に石灰による薬害が発生するので、散布する際はアビオンE1,000倍を必ず加用する。

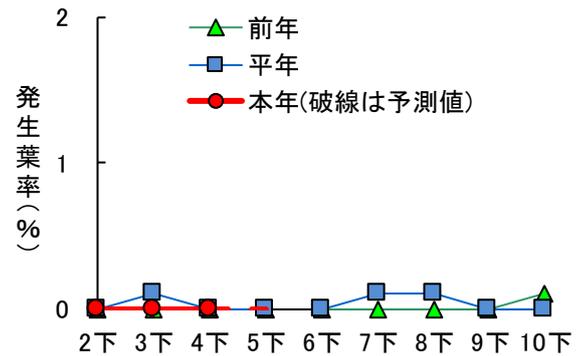


図1 カンキツかいよう病の発生推移
注) 5月下旬までは旧葉を調査

3. 灰色かび病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 温州みかんの着花状況

着花数が多い園地が多く、本病の発生に好適な条件となっている〈+〉。

(2) 5月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 古い花弁は発生源となるため、樹や枝をゆすって人為的に落とす。
- (2) 落花（果）防止のため満開期～落弁期、傷果防止のため一次落果期を中心に薬剤散布を行う。

ナシ 定期調査（6園場）
調査日：4月17日

1. 黒星病

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1、2参照）

発生葉率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉



定期調査園場の様子

発生果率：0%（平年0%、前年0%）
 平年比：並（±） 前年比：並（±）

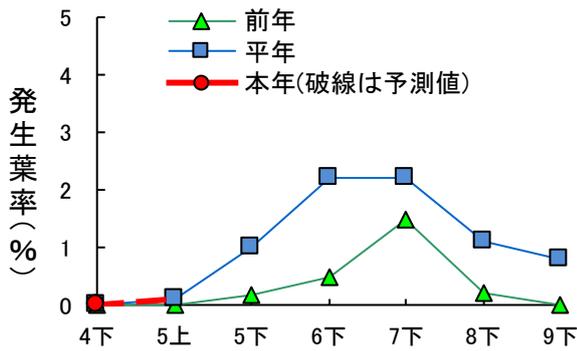


図1 ナシ黒星病（葉）の発生推移

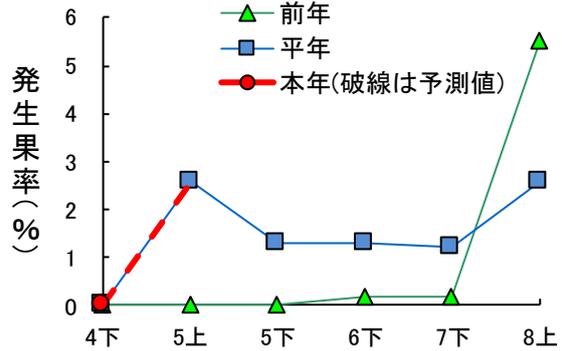


図2 ナシ黒星病（果実）の発生推移

- (2) 主要感染期である開花期前後（本年4月1～20日）の気象（伊万里市のアメダスデータ）
 平均気温はやや低く、降雨量は平年並であったことから、並発生の条件で推移したと考えられる（±）
 平均気温：12.1℃（平年13.2℃、前年13.3℃） 降雨量：122.0mm（平年120.8mm、前年54.5mm）

- (3) 5月の気象予報
 降水量が平年並で、並発生の条件（±）

- 3) 防除上注意すべき事項
 (1) 特記事項を参照。

ブドウ 定期調査（5圃場）
 調査日：4月14～15日



定期調査圃場の様子

1. 黒とう病

[【概要に戻る】](#)

- 1) 予報の内容
 発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
 (1) 発生の現況
 ① 定期調査（図1参照）
 発生葉率：0%（平年0%、前年0%）
 平年比：並（±） 前年比：並（±）
 (2) 5月の気象予報
 降水量が平年並で、並発生の条件（±）
- 3) 防除上注意すべき事項
 (1) 罹病枝の剪除と巻きひげの処分を徹底する。
 (2) 新梢・新葉への感染を防ぐため、萌芽期～新梢伸長期に防除を行う。

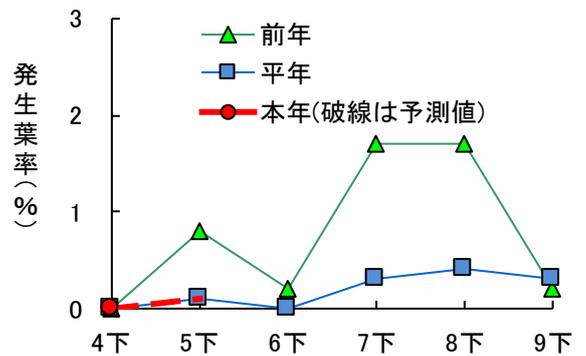


図1 ブドウ黒とう病の発生推移

2. ベと病

- 1) 予報の内容
 発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
 (1) 発生の現況
 ① 定期調査（図1参照）
 発生葉率：0%（平年0%、前年0%）
 平年比：並（±） 前年比：並（±）

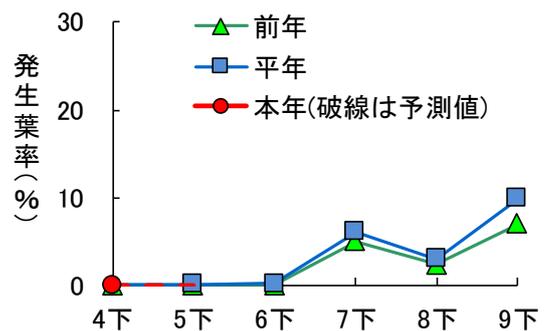


図1 ブドウベと病の発生推移

(2)5月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)罹病葉は伝染源となるため、必ず除去し、園外に持ち出して適切に処分する。

茶

定期調査：7圃場
調査日：4月14～15日



定期調査圃場の様子

1. カンザワハダニ

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生葉率：6.7%（平年4.7%、前年4.9%）

平年比：やや多〈±～+〉 前年比：やや多〈±～+〉

(2)5月の気象予報

気温が平年よりやや高く、降水量は平年並で、やや多発生の条件〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)生息部位である葉裏へ薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。

(2)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一薬剤は年一回の使用とする。

(3)その他は特記事項を参照。

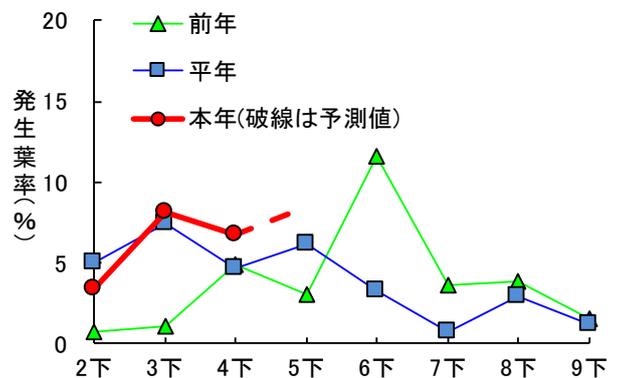


図1 カンザワハダニの茶での発生推移

2. クワシロカイガラムシ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（H30年より雌成虫の調査追加）

発生圃場率は14.3%で、

雌成虫※の寄生株率は4.3%〈±〉

※雌成虫の越冬量が第一世代の発生量に影響する。

（図1は雄繭の発生推移、5月より調査予定）

(2)5月の気象予報

気温が平年よりやや高く、降水量は平年並で、やや多発生の条件〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)特記事項を参照。

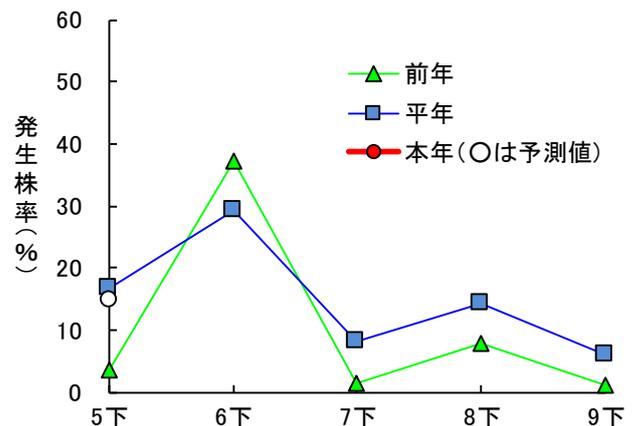


図1 クワシロカイガラムシ(雄繭)の茶での発生推移

3. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

虫数：2.4頭/4ヶ所 (平年2.0頭、前年0.9頭)

平年比：並(±) 前年比：並(±)

(2) 5月の気象予報

気温が平年よりやや高く、降水量は平年並で、
やや多発生の条件(±~+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 5月中～下旬にかけて発生が増加するため、一番茶摘採後、二番茶萌芽～開葉初期の防除を徹底する

(2) 幼虫は葉裏に生息することが多いため、葉裏へ薬剤が十分にかかるように丁寧に散布する。

(3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

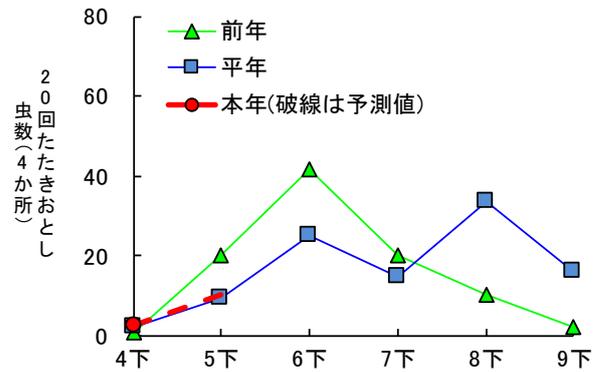


図1 チャノキイロアザミウマの茶での発生推移

4. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量：平年並 (前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

虫数：0.1頭/4ヶ所 (平年0.3頭、前年0頭)

平年比：やや少(一~±) 前年比：並(±)

(2) 5月の気象予報

気温が平年よりやや高く、降水量は平年並で、
やや多発生の条件(±~+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 5月中～下旬にかけて発生が増加するため、一番茶摘採後、二番茶萌芽～開葉初期の防除を徹底する。

(2) 幼虫は葉裏に生息することが多いため、葉裏へ薬剤が十分にかかるように丁寧に散布する。

(3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

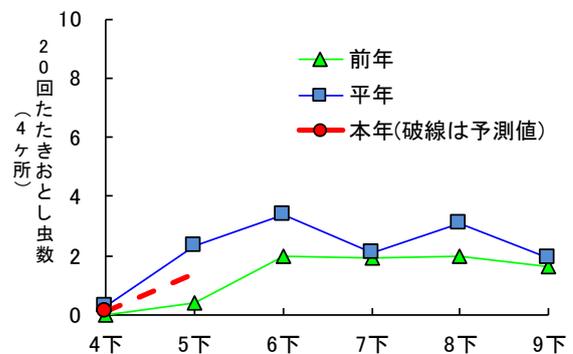


図1 チャノミドリヒメヨコバイの茶での発生推移

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部
〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088
TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085
Mail nougyougijutsu@pref.saga.lg.jp